

(様式)

令和3年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立口吉川小学校
-----	------------

1 学校教育目標	学びの楽しさ あふれる子の育成
2 本年度の重点目標	・基礎・基本の定着を図り、自らすすんで求め、主体的に学習に取り組む態度を育成し、対話的、深い学びにつなげる。 ・思いやりの心をもって、互いの良さを認め合い励まし合う態度を育成する。 ・特別支援教育における組織的支援体制づくりと啓発促進を図る。 ・心身ともに健康で、粘り強く取り組み、やりぬく児童を育成する。 ・教育の専門家として、指導力・組織力の向上に努め、積極的に研鑽を積む。 ・小規模校の特性を生かし、保護者・地域の願いを大切にし、信頼される安全で安心な学校づくりを進める。

3 自己評価結果（達成状況）【 A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない 】

評価の観点	評価項目（取組内容）	取組(達成) の状況	評価	改善の方策
学習指導	○「確かな学力」の向上 ・学習規律と基礎・基本の定着 ・児童が学習の見通しを持ち、主体的かつ意欲的に活動したり表現したりする授業づくり ・学習習慣の定着 ○学習意欲や知識の定着につながる ICT 機器の活用 ・授業におけるタブレット端末の活用 ・タブレットドリルの積極的利用	・児童の実態を踏まえて研究主題を設定し、児童が主体的に学習課題に向き合い、思いや考えを進んで表現できるような学習過程をつくるために、単元を見通して計画を立てたり、課題意識や目的をはっきりさせたりして、児童が意欲的に活動できるようにした。 ・今年度も学習意欲や表現力の向上をめざし、また学習交流の場として、朝の時間に「いきいきタイム」を設定した。継続的な取組の結果、各学年の学習成果の発表に対する意見や感想を積極的に発言する児童が増え、学年を越えた意見交流が活性化した。 ・児童の実態や発達段階に応じた身につけさせたい力や家庭での協力依頼内容を明記した「ともに育てよう口吉川っ子（家庭学習の手引き）」を各学年で別様式に改め、保護者への啓発内容をより具体化した。また、児童用手引きも同様に作成し、家庭学習のあり方について指導した。しかし、児童も保護者も家庭学習の積極的な取組に関するアンケートの回答は低いポイントとなっており、課題が残った。 ・課題となっている語彙力や書いて表現する力の向上をめざし、曜日ごとに内容を統一している朝の時間の取組内容を見直し、視写や暗唱などを取り入れた。その結果、児童の速記力や読む力の向上が見られ、書くことへの抵抗が和らいでいる。	B	・昨年度より改善が見られるものの、学年や学習内容によって児童の受け身的な姿は少なからず見られる。学習計画や発表のモデルを具体的に示すことによる改善がある程度実感できているので、実態を踏まえた今後のさらなるアプローチを模索したい。 ・来年度もコロナウイルスの影響は少なからず残ると思われるが、リモート配信も含め、いきいきタイムなどできるだけ全校生の前で発表、表現する場を大切にしていく。その他にも詩や俳句の作品掲示など、全校的な取組でさらなる交流活動の内容を検討する。 ・「ともに育てよう口吉川っ子（家庭学習の手引き）」を周知するための方策を引き続き検討し、家庭訪問や懇談など、より多くの場で家庭での支援を依頼して、予習のチェック体制を整備したり調べ学習を推奨したりするなど、学習習慣や基礎・基本の定着を図る。 ・これまでに朝の学習で実施していた内容を方法を再検討し、従来のプリントだけでなく、タブレット端末の積極的な活用や「みっきいすてっぶ」のドリル練習など、ツールを幅広く活用できるように、活動のあり方を工夫する。
道徳教育 人権教育	○自他ともに尊重できるこころの教育 ・道徳の時間の充実 ・親子人権学習をはじめとした、さまざまな教育活動を通して人権教育の推進 ・異年齢集団による主体的・創造的な学校行事への取組の推進	・道徳の学習課題に対して、しっかりと考えをもっている児童や、学年を問わず優しく関わることができる児童が多い。また、あいさつや言葉遣いなど、指導が実生活に結びついているところもある。しかし、保護者アンケートからは学校での様子と家庭での様子に乖離が読み取れる。 ・約1か月間の人権期間を設定し、友だちのよいところを見つけ、みんなで共有する活動に取り組み、学習発表会では保護者にも公開した。また、2年ぶりに親子人権学習を実施し、発達段階に応じた人権課題について学ぶことができた。 ・異年齢集団活動は、6年生が様々なアイデアを出して実施内容を工夫し、全校生が協力して楽しく活動できた。また、感染状況や安全面を考慮して、運動場と校舎内に分かれて行うなど、状況に合わせた活動形態の工夫も見られた。	B	・道徳の時間に学習したことが、児童の実際の生活での判断力や実践力につながるように、授業研究による道徳の学習の充実や指導のあり方の共通理解を図る。また、全教育活動を通して人権感覚を高める指導を推進する。 ・人権期間、親子人権学習の実施については、今年度の内容を振り返り、より有効な方法、学習内容を追究していく。 ・教職員の人権感覚を磨くための研修の機会を設定し、全教育活動を通して、自尊感情や思いやりの心を育みながら人権教育を推進していく意識を高める。 ・異年齢集団活動の実施方法については、今年度の方法を継承し、振り返りや計画を大切にしたり、児童会や委員会など班をこえた新しい提案をしたりするなど、内容面のさらなる活性化を図る。
生徒指導	○児童一人一人に寄り添う生徒指導 ・全教職員による児童の共通理解 ・いじめ、不登校に関する組織的な取組 ・基本的な生活習慣と規範意識の確立	・一人一人の児童に寄り添うために、学期に1回、「心の健康観察」（生活アンケート）を実施した。また、実施後にすべての児童に対してその結果をもとにして担任からのヒアリングを実施した。 ・問題行動があった場合には関係職員で集まり、複数の目で今後の対応を検討した。 ・生活目標に合わせて、児童会や委員会と連携し、児童会のあいさつ運動や体育委員会の大縄大会などを実施した。 ・月に1回生活指導委員会をもち、児童の実態の様子の共有を行い、対応を検討した。また、「口吉川っ子のくらし」の内容が児童の実態や時代に適しているかを検討し、修正した。	B	・来年度以降も「心の健康観察」を実施し、合わせてヒアリングも行うことで、児童の内面を把握できるように努める。そして、職員間の共通理解、児童の実態に応じた長期的な指導のため記録を保存し、次年度に引き継げるようにしていく。 ・今後も問題行動発生時には迅速な報告・連絡・相談を行い、複数の目で対応を検討する体制を維持していく。 ・来年度も児童会や委員会と連携し、生活目標を達成できるようにしたい。 ・来年度もコロナ禍における児童の生活スタイルの変化などに合わせて、「口吉川っ子のくらし」の内容を検討する。
特別支援教育	○個に応じた教育の実践と体制づくり ・支援の必要な児童への適切な対応 ・交流及び共同学習の推進	・個別の指導計画や教育支援計画を作成し、共通理解したり、会議等で児童の様子を話したりして、全教職員で全校生を育てている。支援の必要な児童の保護者への連絡を密にし、専門機関に相談する機会を設けた。 ・教室環境を整える、学習に関するルールを決める、授業の見通しをもたせる等、ユニバーサルデザインの考え方について周知し、個人差への配慮も行っている。 ・にここウィーク（特別支援学級の教室公開）や居住地校交流を通して、お互いの理解と啓発を図った。児童は、日々の生活や授業で、積極的に関わり合い、理解を深めている。	B	・保護者との連携を密にして、児童の実態をより理解、把握し、個に応じた適切な支援に努める。特に支援が必要な児童については、より細やかな対応するために、専門機関との連携を図り、教育相談の内容や発達検査結果のフィードバックをしてもらい、学校でできる支援を継続的に共有、実行していく。その際、個別の教育支援計画を更新して引き継ぎ、児童がより充実した生活を送れるようにしていく。 ・今年度引き続き、特別支援学級の児童については、交流学級だけでなく、他学級との合同授業や学校行事などを通して、お互いの理解をさらに深めていく。
安全・防災教育	○安心・安全な学校づくり ・防災教育の推進 ・安全指導の実施 ・感染症対策の実施	・火災や地震を想定した避難訓練では、事前に訓練時刻を児童に知らせずに、それぞれ昼休みおよび始業前に実施した。それでも教師の指示に従って落ち着いて避難する児童の姿を見ることができ、教職員が近くにいらない状況や教室以外で訓練を始めた状況下においても、自分自身で命を守る行動をとることができた。昨年度の課題であった頭を守る意識づけに関しては、ランドセルや座布団などを用いた守り方の事前指導を実施したため、半数ほどの児童は訓練時の行動が改善したが、さらなる意識の向上が可能と考える。 ・気象警報や悪天候および感染症拡大による臨時休校を想定したドライブスルー方式の引き渡し訓練を実施した。緊急事態宣言中だったため、訓練は児童のみで実施したが、その後実際に引き渡しを2回実施し、その都度協議しながら改良を加え、児童や職員がスムーズに対応できるようになった。 ・不審者対応訓練では、三木署の方を招き、児童は身の安全を確保する方法、職員は主に不審者に対峙した場面での具体的な対応を学ぶことができた。 ・コロナ感染症、熱中症対策は、児童へ繰り返し指導を行い、CO2モニターなど学校備品の整備等も昨年度よりさらに充実し、徹底して行えた。	A	・避難訓練については、今後も実施時間帯、想定内容、児童への告知の有無等、様々な状況を想定した練習を行い、児童の防災意識を高めていく。地域や家庭とも連携して防災教育を進めていくための方策を研究する。 ・次年度は地域防災訓練を実施する予定なので、保護者参加型の運動場での引き渡し訓練や消火栓を用いた放水訓練、消火器を用いた消火訓練などの計画を考えたい。 ・ここ数年、気象警報や悪天候による引き渡しに年に数回あることから、必要に応じてドライブスルー方式の引き渡し訓練を行う。より円滑に保護者を誘導し、確実に児童を引き渡せるよう、教職員の役割および行動の共通理解や、保護者への周知を徹底したい。実施時期は梅雨入り前が望ましい。 ・引き続き、コロナ感染症対策、熱中症対策には万全を期す。
学校の組織力の向上 教職員の資質能力の向上	○児童に寄り添い、共に歩む教師 ・小規模校のよさを生かし指導力を向上させるための研修の実施 ・タブレット端末活用能力の向上 ・子どもに向き合う時間の創出のための業務改善の推進	・今年度も「学力の向上」「表現力の向上」の目標を掲げて取り組んだ。全教員が研究授業を行い、学習指導案の検討、事前・事後研究会を通して小規模校のよさを生かした指導力向上を目指してきた。特にタブレットの活用についてのスキルアップへの意識は高く持て、教育センターの専門研修講座の受講数も大幅に増加した。しかし、タブレット等、新しい指導法にまだ自信が持てないためか、アンケート調査による教員の意識はやや低下した。現在は、コロナ感染拡大に伴う自宅待機を余儀なくされた児童の学びを止めないよう、オンライン授業を積極的に行っている。教員同士、情報交換をしながらよりよい授業法を模索している最中である。 ・学校業務改善の点でも、コロナの影響により中止や縮小を余儀なくされた行事はアフターコロナ禍においても縮小できる部分がより明確になってきた。また、職員の勤務時間に対する意識は高まり、残業時間も減ってきている。 ・保護者、児童のアンケート共、「学校生活は楽しい」の部分で昨年を上回っている点は、種々の取組の成果と言え、学校運営上最も大切な部分である。しかし、否定的な回答をしている児童がいることにも着目し、その原因を究明し、解決しなければならない。 ・今年度は、コロナ感染発生が少なくなっている時期に、環境体験事業・町探検・老人クラブの方と花植えや書初め大会を行うなど、昨年度よりは地域ボランティアとの交流は行えた。また、開催予定日に実施できなかった行事については、別日を設定して実施したり、規模を縮小しながら参観日や学習発表会を行ったりと、できうる限り保護者に学校や児童の様子を見てもらおう機会を設定した。 ・10月に北播小学生陸上競技記録会、1月に三木市小学生駅伝競走大会が行われた。その大会に向けて放課後には地域の学生や陸上経験者に指導に来ていただき、練習を行った。専門的な指導を受けたことで、明確な目標をもって練習や本番に臨むことができた。 ・学校ホームページについては、学校行事を中心に更新したり、SWAYというインターネットを使った情報発信手段を新たに利用し、日々の学級の様子を保護者にも発信した。コロナ禍で家庭・地域との交流ができない中でもあるので、昨年度よりは、若干閲覧数は増えたものの、今年度ももっとホームページの更新を意識しておくべきであった。	B	・児童一人一台のタブレットの活用については、教員が自信を持って活用できるよう、さらに研修を充実させていく。特にハイブリッド型のオンライン授業がよりスムーズに、より効果的になるよう研修を積む。 ・自主的な研修、教材研究等、児童の学力アップにつながるための時間の創出につながるよう、業務改善をさらに進めていく。特に学校行事については、2年間のコロナ禍の経験を生かし、スマートな運営になるよう改革を進めていく。 ・子どもたちが学校生活を楽しく感じ、安心して通える学校作りを進めるために、学習指導、生徒指導、安全指導等をより充実させていく。
家庭・地域との連携	○地域に根ざした学校づくり ・広報活動の充実 ・地域の教育力を生かした学習活動の推進 ・地域と連携した諸行事の開催 （コロナ感染状況を見極めながら検討する）	・今年度もコロナ禍により、行事の制限を余儀なくされたが、昨年度に感じた体験活動の重要性を念頭に、コロナ禍でもできることを模索し、行事を行った。PTAの運営委員会を、オンラインで行ったことは、大変意義があった。通常の会議を滞りなく実施できたことに加え、子どもを家に置いて会議に出かけなくてよいという子育てする保護者ならではのメリットを発見することができた。コロナ禍後においても、積極的に利用できる方法として引き継いでいきたい。 ・教職員のアンケートが0.1ポイントマイナスになっている。地域や保護者と連携を図っていく行事が思うように実施できないことが理由として考えられるが、コロナ禍後を見据え、今後より一層の、学校・家庭・地域で児童を育む学校運営を行っていく。 ・今後も学校の取組の様子を広く知ってもらうために、教職員全員でホームページの更新に力を注ぎ、新しい方法も模索していきたい。	B	・今年度もコロナ禍により、行事の制限を余儀なくされたが、昨年度に感じた体験活動の重要性を念頭に、コロナ禍でもできることを模索し、行事を行った。PTAの運営委員会を、オンラインで行ったことは、大変意義があった。通常の会議を滞りなく実施できたことに加え、子どもを家に置いて会議に出かけなくてよいという子育てする保護者ならではのメリットを発見することができた。コロナ禍後においても、積極的に利用できる方法として引き継いでいきたい。 ・教職員のアンケートが0.1ポイントマイナスになっている。地域や保護者と連携を図っていく行事が思うように実施できないことが理由として考えられるが、コロナ禍後を見据え、今後より一層の、学校・家庭・地域で児童を育む学校運営を行っていく。 ・今後も学校の取組の様子を広く知ってもらうために、教職員全員でホームページの更新に力を注ぎ、新しい方法も模索していきたい。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

- ・これまでの継続されてきた取組に対し、今年度の課題を明確に示され、各項目ごとに妥当性のある評価をされていると思う。
- ・成果・課題が分かりやすく、来年度に取り組むべきものが明確になっている。教員の数値が下がったことは考察の通りであると思う。
- ・コロナ禍における自己評価方法について、通常と同一でよいのかどうかも検討の一つではないかと思う。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
落ち着いて学習に取り組め、個々の個性を肯定し表現力を培う取組が見受けられる。「いきいきタイム」の効果も少しずつ表れているようで、人前で話す事は自らの表現力を養える場なので是非継続してほしい。コロナ禍で制約がある中で試行錯誤を重ねられ取り組んだ姿勢は非常に評価できる点である。コロナ禍がきっかけとはなったが、積極的にタブレットを活用した事は最近の子どもたちからすると興味を示しやすかった点である。今後も小規模校に特化した活用方法を検討する必要もあるのではないかと考える。評価は、Bが適切だと考える。
道徳心が無い大人が増えてきている世の中で、この項目は重要な項目といえる。友だちのよい所を見つける、言ってあげるという事は先ず他人に興味を持たせる意味で非常に重要である。「さかせよう！色とりどりの花いっぱい」も、見えることが増えて、児童に分かりやすい。人数が少ない学校ならではのメリットとしては同学年だけでなく上級生や下級生との交流も盛んに行われる事は大きくなってからの社会でも役立つ経験になっている。友だちを大切に、助け合う姿が散見され、上級生の頑張りが次のよりよい文化へつながっているのがわかる。教員の見守り、支援も最適であったのではないかと。取組内容としてはマンネリ化もあるようだが、そこは保護者の意見等も参考にして新たな取組に繋げてもらいたい。評価は、Bが適切だと考える。
「心の健康観察」は大切な記録だと考える。子どもたちの日々のくらしや世界がコロナ禍でもとても狭くなっている。ストレスを抱える子どもたちにとって、この項目は、非常に重要な項目であると考えます。担任は、授業のみならず、休み時間にも気を配っていることを評価する。いじめ問題で一番の問題は「見て見ぬ振り」をする事。子どもたちに、困っている人がいたら先ず声を掛けるという指導を期待したいし、先生方にもそうであってほしい。改善の方策の方向性は正しいと思われる。コロナ禍における生徒指導という、これまで経験しなかった指導内容もあったかと思うが、先生方の、信念を持った指導をこれからも願いたい。評価は、Bが適切だと考える。
対象の児童に対し特別扱いをする事なく、違いを認め合って特別支援教育を推進をしているように見受けられ非常に良い事だと思う。今後も専門機関の活用や出来る限りの支援をして頂ければと思う。エレベーターやスロープなどの新設によって、いろいろな立場から考える機会が出来たことをぜひ有効活用してもらい、意識して心のバリアフリー化も推し進めて頂きたい。評価は、Bが適切だと考える。
危機管理は常に最悪を想定しなければならない。それが基本と考える。過去の事例を参考にしたり想像力を働かせて訓練に反映させることが肝心である。最近では警報の回数が増えたり、ゲリラ豪雨があたりりして先手先手の判断の必要なことが増えている。それ故、引き渡し訓練等の定期的な訓練は、心の準備の幅が広がり、非常に効果が高いので、継続して頂ければと思う。安全な登下校の指導についても、防犯ブザーの所持を徹底したり、PTAと連携し危険度の高い箇所の改善に努めたりと、継続した取組が必要である。昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症対策では、検温・手指消毒・マスクの着用・行事での人数制限等、できうる限りの対策を行っているが、日本全国へのあまりの広がりによってそのような感染症対策が十分にできていると判断するのが難しい。そのためか、教員の評価ポイントが下がっていると考えられ、防疫については、情報を収集し、適切な対策を取っていくことが重要だ。評価は、おおむね妥当と考える。しかし、昨年度に比べ教員の評価にマイナスポイントが見受けられ、他項目に比べ高いというわけでもないため、その点では、Bともいえる。
学習発表会の場において、教職員と児童が一緒に取り組んで、元気に発表している姿を見たり、児童のアンケート結果で、学校生活を楽しんでいる様子がうかがえたことは大変良かった。教員の自主的研修は、大変意欲的で良い。その中で、ぜひ若い先生方に人生経験や教育経験豊富な管理職やベテランの先生がそれを活かしてそれぞれの先生方に合った研修を行ってほしい。ITの積極的な導入については賛成だが、教育の基本は対面だと思うので児童と向き合う時間はこれからも大切にしていきたい。また、学校行事を見直したり業務改善を行ったりして子どもたちにとって楽しい学校になるよう精進してもらいたい。評価は、Bが適切だと考える。
学校運営については地域の協力が欠かせない。さらに、実体験の楽しさ・尊さは、幼い時ほど重要で、子どもは地域の温かさの中で育っていくものであるから、今後も引き続き学校が核となって地域をつなげてもらいたい。PTA運営委員会の方法は、メリット大で良かった。コロナ禍である事を考慮するとマイナスポイントは想定内と考える。評価は、Bが適切だと考える。